

『現代アメリカ宗教地図』 藤原聖子 平凡社新書、2009年

天理大学人間学部准教授
島田 勝巳 Katsumi Shimada

アメリカについて、われわれは毎日のように多様な情報に晒されているものの、実際にはあまり多くを知っているとは言い難いのではないだろうか。たとえば宗教について。アメリカはよく、先進国の中でも突出して「宗教的な国」だと言われる。だが、この場合の「宗教」とは何だろうか。アメリカのキリスト教とはどのようなもので、キリスト教以外の宗教はどうなっているのだろうか。

本書は、こうしたわれわれの素朴な疑問に答えてくれる一冊である。著者は「はじめに」の中で、本書の特徴として以下の三点を挙げている。第一点目は、現在のアメリカの宗教状況の記述・分析である。第二点目は、そうした様々な宗教現象・運動を比較対照しながら、現代のアメリカにおける宗教の全体像(マップ)を描き出すことである。そして第三点目は、動画サイト・ユーチューブを第一次資料として用いている点である。これら三点は、いずれもかなりユニークなものである。以下では、本書のこうした3つの特徴に沿いながら、著者の論点の独自性について、若干の論評を加えてみたい。

まず第一点目については、確かに日本でも近年、アメリカのキリスト教、特に保守派の動向・背景についての本がいくつか出版されているが、それ以外の宗派・宗教をも含めた全般的な解説書はほとんど見当たらない。アメリカはやはりキリスト教が大きな影響力を持つ国であるが、同時に宗教多元国家でもある。ようやく近年になり、アメリカのキリスト教史についての手頃な解説書が何冊か出版されているが、それらはいずれも、著者が本書で取り上げているようなキリスト教以外の宗教や新宗教、スピリチュアルな運動や無神論に至る広い範囲を網羅するような本ではない。本書がカバーする関心の幅には、神学者や歴史学者にはない、宗教学者としての著者のスタンスがよく反映されていると言えよう。

この点は、続く第二点目に直結している。著者はアメリカの多様な宗教現象の位置関係を、まずは右/左、あるいは保守/リベラルの対立軸を中心に考察する。政治・社会面においてこの対立軸の指標の中心をなすのは、伝統的価値観・ライフスタイルに対する態度の違いである。当然、保守は伝統遵守・回帰に向かい、リベラルは伝統からの離陸、あるいは多様な価値観の受容に向かう。著者はこうした枠組みをもとに、さらにはアメリカ独自の政教分離のあり方に対する態度の違いに注目しながら、「キリスト教諸派」、「市民宗教」、「見えない宗教」、「新宗教」、「宗教保守」、そして「マイノリティの宗教」という6つのグループに分類し、その位置関係を描き出している(44頁)。著者によるこの分類作業は、その結果自体が本書の章構成を成しており、そこからアメリカ宗教の全体像についての著者の視点を窺い知ることができる。

特に興味深いのは、著者がそこで、大胆にも「市民宗教」や「見えない宗教」といった、宗教社会学上、これまで幾度となく論争を引き起こしてきた概念を積極的に用いている点である。「市民宗教」(civil religion)に関して言えば、これはR. N. ベラーがルソーの同概念をアメリカ独自の文脈に置き換えて用いたもので、その妥当性をめぐってはかつて活発な議論がなさ

れたことがあった。ベラー自身はこの概念を、アメリカにおいて教会と並んで存在する一連の信仰、象徴、儀礼—ある宗教的次元—として捉えていた。重要なのは、ベラーが一貫してこの概念を、国民を超越する倫理的基準に国民自身を従属させるもの、あるいはそうした超越的観点から国民を裁定する基準として捉えているという点である。この点からすれば、「市民宗教」を「国民統合のために、国教に近い役割を果たす」(83頁)ものとして捉えている著者の理解にはやや違和感を禁じえない。だが、新書という体裁からすれば、そうした細かな議論に立ち入るのは難しかったのかも知れない。

とはいえ、全体として見れば、政教分離をめぐる問題を基点として、アメリカにおける宗教現象の多様性を手際よく分類する著者の技量は見事である。これは——本書には明確には表れてはいないが——著者のアメリカ宗教史全般に関する幅広い裏づけがあってこそ初めて可能となる視点であるに違いない。逆に言えば、こうした著者の行き届いた分類は、宗教史的背景に関する十分な知識を持ち合わせていれば、その的確さをより良く理解できるものであるように思われる。

最後の、本書の第三点目の特徴は、おそらく本書をもっともユニークなものにしている点であろう。今や完全に市民権を得たとは言え、動画サイト・ユーチューブの学術資料としての価値を示すには、やはりそれなりの注意と覚悟を要したことは想像に難くない。著者自身も述べているように、動画サイトの扱いには信憑性の問題が不可避的につきまとうからである。さらに、こうした方法は、専らフィールドワークを旨としてきた宗教研究者からすれば、やや味気なく思われるかも知れない。だが著者によれば、ユーチューブには、特定の教団や信者の活動を、多様な視点から理解することを可能にするという大きなメリットがある。実際に、本書に散りばめられたさまざまなユーチューブの写真には、著者による丁寧な解説が加えられ、読者を飽きさせない。中には更なる好奇心を掻き立てられ、自らそうしたサイトをチェックする読者もいるはずである。

しかも、こうした動画サイトの利用は、著者が近年深くコミットしている、学校教育の場における宗教教育のあり方にも繋がるテーマである。宗教学のような経験的資料が鍵を握る分野においては、動画が持つ教育的効果には計り知れないものがある。こうした教育上のツールという点からもまた、本書は斬新かつ有益な視点を多く含んでいる。現代アメリカ宗教の概説書としてのみならず、宗教学教育の新たなモデルケースの一つとしても、ぜひとも参考にしたい一冊である。

